

●特別寄稿●

ハーバードの学生支援システム その一

伊藤 孝行

(名古屋工業大学大学院情報工学専攻助教授)

粥川 裕平

(名古屋工業大学大学院産業戦略工学専攻教授)

安全・保健センター長

一 はじめに

平成一七年三月より、筆者はハーバード大学の Division of Engineering and Applied Science、及びマサチューセッツ工科大学 (MIT) の Sloan School of Management の客員研究員として、米国マサチューセッツ州ボストンに滞在している。ボストン滞在の研究活動の合間に、学生支援システムに関して調査し、我が国の学生支援の発展を目的に、シリーズで報告する予定である。ボストン地区は米国発祥の土地として知られている。この地区はニューイングランド地区と呼ばれるように、英国の町並みのような古い町並みが残っている。また、ハーバード大学と MIT の他にも、

ボストン大学やタフツ大学など有名私立大学があり、全米一の学術都市としても知られている。本稿では、ハーバード大学とその学生支援を中心に紹介する。

二 ハーバード大学の概要

ハーバード大学は一六三六年に創立され、三七〇年の歴史を持つ米国最古の私立大学である。メインのキャンパスはケンブリッジ市にあり、ボストンからチャールズ川沿いを西の方角に、車で一五分程度の場所に広大な敷地を持つ。その他にもビジネススクールは近隣の allston 地区、メディカルスクールは longwood 地区にある。ハーバード大学の基金は二兆円を超え、年間の寄付金も八〇〇億円を超えると

言われており、世界中の大学と比較して圧倒的な経済力を持つ。この強力な寄付金によって多くの建物が建造されており、特に面白いのは、ポラロイド社から寄贈されたというカメラの形をした巨大なサイエンスセンターという建物である。また、筆者が関係する計算機科学関係のグループが入っている Maxwell・Dworkin という建物も、マイクロソフト社の創設者であるビルゲイツ氏とステイブバルマー氏の寄付によって建造されたそうである。Maxwell・Dworkin という名前はゲイツ氏とバルマー氏の母親の旧姓である。その他、自然史博物館には巨大な恐竜の化石があったり、Fogg 美術館にはピカソをはじめとした貴重な絵画が保管されている。

三 ハーバード大学とMIT

ハーバード大学から、車で一〇分ボストン方面(東)に走った所に、MITがある。MITは一八六五年から学生を受け入れている工科大学である。CSAIL(計算機科学と人工知能研究所)や、Sloan School of Management、Lincoln Lab、Media Lab、Whitehead Inst.など、世界的に最先端の研究が行われている。CSAILのビルディング statacenter は大変特異で興味深い形をしており、一見の

価値がある。

実際にこの地域に来て、ハーバード大学とMITが極めて近い場所に存在していることに驚いた。車で一〇分、バスでも一〇分、地下鉄だと二駅という近さである。授業の単位の互換制度、多くの共同セミナー、また多くの共同プロジェクトがあり、極めて効率的でレベルの高い相互作用が実感できる。さらに、ハーバード大学の客員研究員、特に計算機科学に関する研究者はハーバード大学とMITの両方をその活動の場とすることが多いようである。

また、ハーバード大学とMITは互いのハイレベルさからライバル意識も極めて強い印象を受ける。筆者が互いのライバル意識を最も感じたのは、各大学の関係者から聞いた次の二つの言葉(しゃれ)である。

●ハーバード関係者にMITの話をした時、ハーバード関係者は「Ah, the red brick school down the road(ああ、道を下ったところにある赤いレンガの学校ね)」と言う。●MIT関係者にハーバードの話をした時、MIT関係者は「Ah, a small university on the river.(ああ、川岸の小さな大学ね)」と言う。

ただ、「どっちが好きだ」と聞かれるのは、なぜか毎回、ハーバード大学の関係者からである。

筆者は、五年前に西海岸の Los Angeles (LA) に滞在

していた。同じ米国でも時差が三時間もあり対極的な位置にある。ボストンとLAを比較すると、同じ米国でも全く異なる環境と文化を感じる。ハーバード大学の国際オフィスに行ったときも、LAに滞在していたことを言うと「It's another country」とはつきり言われたほどである。ボストンとLAを約一年ずつ過ごした筆者が独断で比較すると、LAはかなり陽気な雰囲気で、細かいことを気にしない印象を受ける。逆にボストンでは、文化的かつ繊細なコミュニケーションが可能だと思う。特に、家族で過ごすにはボストンは非常に良い環境で、生活環境が(LAよりは)きめ細かく設計されている。

四 ハーバード大学の学生支援

ハーバード大学での学生支援の実態に関し、Bureau of Student Counsel という学生のメンタル面のサポート組織にて調査を行った。ハーバード大学には、学生の心理面のサポート組織がいくつかある。その中でも特に次の三つが中心的な役割を果たしているようである。

- ① Bureau of Student Counsel (BSC).
- ② Incommon.
- ③ Harvard University Health.

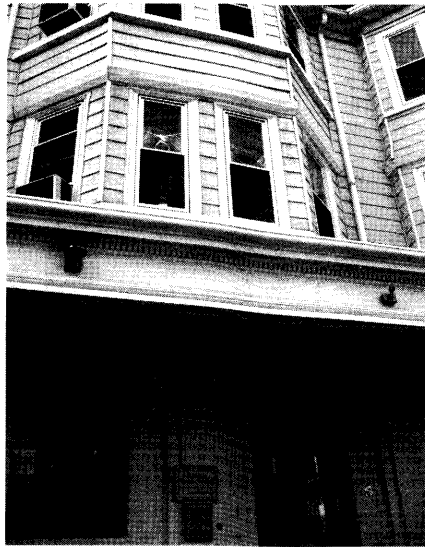
①は、学部学生から大学院の学生までの学校生活全般のサポートをしている。わが国の大学の「学生なんでも相談室」と同じような目的意識を持つ組織である。②は学生中心のボランティア組織で、電話をすればすぐに話し相手がでくれるという趣旨の組織である。③の Bureau of Student Counsel と連携の深い組織のようである。③はハーバード大学内の病院である。その中にメンタルヘルス科があり、そのメンタルヘルス科中に学生向けメンタルヘルス科がある。こちらは実際に薬を出すことがあるというのが①との違いであるということである。Mr.D.Richard Kadison がチーフで、彼の著書『College of the over whelmed』にメンタルヘルス科のコンセプトが詳述されている。

今回は、学生のための総合的支援に注目するため、特に①に関して調査をした。突然の訪問にも関わらず非常に丁寧な説明を頂けた。①はハーバード大学の中心街のハーバードスクエアの一角にある、やや大きめの建物(外観はなんだか普通の家のような感じ)である。一階に事務所があり、約十数名のカウンセラーが常駐しており、それぞれ日本大学の先生くらいの部屋を持っている。興味深いのは、共用スペースや各部屋に暖炉やソファアが一般家庭のリビングのように置いてある点である。これは学生がリラックスして話ができるような設定にするためだとのことであ

る。

BSCの主な機能は、(一) 学生とカウンセラーの話し合いの場の提供、及び(二) Tutorシステムの管理、などである。

(一) 学生とカウンセラーの話し合いの場の提供とは、学生がいつでもやってきて、いつでも話し合いができるような体制を整えているということである。またそのためのアポイントメントスケジュールなどを管理している。これはわが国の各大学の保健(管理)センターの学生相談室と非常によく似た機能である。特に、BSCが気を遣っている



Bureau of Student Counselの建物の外観。一般の民家のような雰囲気を持っている(写真の撮影はハーバード大学より許可を受けています)

のは、その雰囲気作りだということである。事務所は非常に奇麗で、まるで、米国の一般の家の中のような設定になっている。暖炉やソファが用意されているのである。学生はそこへ来たなら、しゃべりたいことをしゃべればいい、ということが前提だそうである。もちろん、名前など個人情報 は厳重に管理されるそうである。

カウンセリングといっても、学校に出て来れないなどの話だけではなく、どうやって修論審査を乗り切るかとか、期末試験を乗り切るかという話もケアしている。また、一対一の個人支援だけでなく集団療法的支援も行われている。

(二) チューターシステムというのは非常に特長的な興味深いシステムである。チューターシステムでは、ある学生が他の学生の生活の支援をすることを管理する。例えば、新入生のA君が授業Xに関して困っていたら、授業Xの単位を過去に取って、優秀な成績(B+以上)を修めたことがある上級生のB君が、A君のチューターとして面倒を見る、というシステムである。チューターも学生で二ドドル/時の対価が支払われる。支援を受ける学生はBSCに四ドドル/時支払う。差額の八ドドルは大学がサポートしているそうである。チューターシステムは主に、授業に関する単位取得計画やテスト対策、外国人学生向けの英語訓練などのためのシステムである。

チューターの募集は、自薦の他にBSCが関連教授や部署に呼びかけることよって行われている。興味深いのは、学生チューターで優秀な人は、優秀(Awarded)チューターとして活躍することができるという点である。優秀チューターになると、週に二時間以上のチューター活動を行う、及び専門のカウンセラーと週に一度「支援方法」に関して議論する、という義務が設定されるが、給料が一六ドドル/時にあがる。チューターは生活面のサポートを含めて支援しており、さらに心理面のことに関しては、うまくカウンセラーに橋渡しできる形になっているそうである。毎年二五〇名から三〇〇名のチューターが登録している。

日本の大学には残念ながらこういう機能は見受けられない。個々の研究室内やクラス単位ではある程度師弟関係のような感じで支援が行われている。チューターシステムのような全学的な学生同士の支援関係は非常に重要だと思われる。支援する学生にお金を出すというのがいかにもアメリカっぽい合理的なシステムだが、チューターにとつては非常に良いインセンティブになり、効果的に機能している。

その他のBSCの機能としては、学生が困ったときの関連サービス部署の紹介や、学生支援の学生自身のボランティア組織の指導もしているそうである。

五 おわりに

「ハーバードの学生支援システム」その一」では、ハーバード大学の概要と、ハーバード大学の学生支援に関して報告した。特に全学的なチューターシステムは、日本の大学ではあまり見受けられないシステムであり、かつ非常に効果的に機能しているようである。心理的に問題のある学生に対して、教員から働きかけるよりも、まずは学生が働きかけたほうが効果的かと思われる。また、専門のカウンセラーが常時待機している点も、ハーバード大学の学生のメンタルケアに対するサポート体制が整っていることを示す重要な点である。学生対教職員数において、日米の格差はあまりに大きい。勿論学生の授業料も米国はわが国の五倍以上である。スタッフと予算が多いから可能なのか、学生の修学、就労、メンタルヘルスケアのニーズがあるからこうした取組が可能なのか、日米の比較検討は次回に委ねることにする。

(一) ポストン近郊には築一〇〇年を越える赤レンガの建物が
多い。